

村上春樹『海辺のカフカ』論

—— 赤と緑のメタファー ——

大岡 愛梨沙

一 はじめに

村上春樹『海辺のカフカ』^(注1)は、二〇〇二年九月に新潮社より発行された、村上春樹の一〇作目の長編小説であるが、本作においては重要な色彩として、赤と緑の二色が挙げられる。

本作では、「赤」は△暴力▽によって発生する「血」の色であり、△暴力▽からの逃げ場としての「森」には「緑」が広がっているといえられる。

本論では、カフカ少年が「赤」と「緑」のそれぞれの色彩をどのように認識しているのか、またその認識にどのような変化が生じた結果、カフカ少年の抱える「孤独」についての認識が変化し、△成長▽に至ったのかについて考察することを目的とする。なお、論者は修士論文において村上春樹『海辺のカフカ』における△暴力▽とそれに対する△癒し▽について研究

したが^(注2)、本論はそれをもとに考察をすすめるものである。

先行研究では、『海辺のカフカ』における「赤」と「緑」の色彩に注目した先行研究は見受けられない。そのため、本作における色彩の象徴性については考察の余地があるといえる。

考察にあたって、本文及び引用文献における傍線は論者によるものとし、傍点は原文によるものとする。

二 「赤」と「緑」

村上春樹作品において、赤と緑の色彩が最も印象的な代表作としては、『ノルウェイの森』とその装丁が挙げられる。次に、村上春樹がインターネット上で読者の質問に答える特設サイト上でおこなった返答^(注3)を引用する。

Q. 『ノルウェイの森』の装丁の意味は？

(略)『ノルウェイの森』が出版されたのは1987年の9月で、べつにクリスマス・カラーを最初から使ったわけではありません。あの赤と緑は前から使いたかったわいた色だったのです。あの色を選んだときには出版社の人々に「こんなきつい色じゃ本は売れませんよ」と反対されたことを覚えています。色にはとくに意味はありません。金色の帯に変えたのは出版社の意向で、僕はそのときには日本にいませんでした。もしそのときに相談されていたら断っていたと思います。(略)

村上は『ノルウェイの森』の装丁の意味は?という質問に対して、「あの赤と緑は前から使いたかった色だっ」と返答している。続けて、「出版社の人々に『こんなきつい色じゃ本は売れませんよ』と反対された」上でこの色彩にこだわったとも回答していることから、村上春樹にとって赤と緑は重要な色彩であることがうかがえる。

この赤と緑という色彩が、本作の作品内において、大島さんによって象徴的に話される場面がある。その場面を次に示す。

「君を脅かすつもりはないけれど、緑色のロードスターは、夜の高速道路ではもつとも見えにくい車のひとつなんだ。背が低い色が闇にまぎれてしまう。とくにトレイラーの

運転席からは見えにくい。気をつけないとすごく危険だ。とくにトンネルの中がね。ほんとうはスポーツカーは車体の色を赤にするべきなんだよ。そのほうが目だつ。フェラーリに赤が多いのはそのためだ」と彼は言う。「でも僕は緑色が好きなんだ。たとえ危険でも緑がいい。緑は森の色だ。そして赤は血の色だ」

(第13章一九二〜一九三頁)

これは、大島さんが車体の色によって事故率に差があることをカフカ少年に伝えている場面である。大島さんは、「緑色のロードスターは、夜の高速道路ではもつとも見えにくい車」であり、その原因として、緑という色彩が「闇にまぎれてしまう」ことで「危険」性が上がるためだと伝える。そのため、カフカ少年に「車体の色を赤」にして目立たせることで危険を回避することを推奨する。

赤という色彩について松岡武氏は、「目立つ色」、「目の前にぐっとせまってくる色」、「ものを大きく見せる色」である(注4)と述べている。また、そのような効果を持つ色彩を「膨張色」と呼び、「膨張色」の車体による事故率と比較したときに、ダークグリーンのような、実際よりもものを小さく見せる効果のある「収縮色」の車体は、「事故を起こしやすい危険な車体」であるとも述べている。このことから、大島さんによって語られ

る車体の色彩による事故率の話題は、それぞれの色彩の効果に基づいたものであるといえる。

大島さんは、車体の色によって事故率を低下させ、危険を回避するという話題に続くかたちで、「緑は森の色だ。そして赤は血の色だ」と話す。清野恒介氏は、赤から連想されるもののうちのひとつとして血が、緑から連想されるもののうちのひとつとして森があると述べており^(注5)、大島さんのこの発言は一般的に連想される範囲の例として挙げているに過ぎないともいえるだろう。しかし、カフカ少年がのちの場面^(注6)で森に入っていくことと緑の色彩には、一般論を超えた象徴が込められている可能性があると推測する。

村上春樹作品において、「赤」と「緑」が最も印象的に登場する作品は『ノルウェイの森』であり、その装丁には注目する必要がある。先の引用にあるように、村上春樹は『ノルウェイの森』の装丁について「あの赤と緑は前から使いたいと思っていた色」であると話しており、出版社の反対を押し切ってまで採用していることから、この二色には重要な意味があると考えられる。

『海辺のカフカ』では、大島さんの車体の色による事故率の話題の中で「赤」と「緑」が登場する。しかし、大島さんは「赤」

を「血の色」、「緑」を「森の色」でもあると話している。このことから、「赤」と「緑」は車体の事故率の話題に限定されるだけではなく、作品全体と大きく関わるイメージが込められた色彩であり、考察の必要があると考えるのである。

三 「血」と「赤」の関係性

本節では、『海辺のカフカ』の本文を引用しながら「赤」と「血」の関連について分析する。まず、カフカ少年と大島さんが会話する場面を示す。

「もちろん君はフランツ・カフカの作品をいくつか読んだことはあるんだろうね？」

僕はうなずく。「城」と「審判」と「変身」と、それから不思議な処刑機械の出でくる話」

「流刑地にて」と大島さんは言う。「僕の好きな話だ。世界にはたくさん作家がいるけれど、カフカ以外の誰にもあんな話は書けない」

「僕も短編の中ではあの話がいちばん好きです」

(第7章九七頁)

カフカ少年は、フランツ・カフカの作品の中でも『流刑地にて』

が「短編の中で」「いちばん好き」だと話す。続けて大島さんから、
 などどこに興味を持っているのかと尋ねられると、作中に
 登場する処刑機械の描写が「僕らの置かれている状況を誰より
 もありありと説明」（同頁）していることに興味を持っている
 と返答している。

この、『流刑地にて』に登場する処刑機械が何を象徴してい
 るのかについて、論者は修士論文において次のように分析した。

『流刑地にて』における処刑機械とは、人間に常に一方
 的に攻撃をおこなう存在がいることを象徴していると考え
 られる。カフカ少年にとって、そうした『流刑地にて』は、
 処刑機械が大量の人間を殺していく状況が描かれているこ
 とで、人間が常に理不尽な攻撃を受ける環境の中で生きて
 いることの象徴なのだと推測される。

処刑機械は、針で人間の体を突き刺しながら罪の名を刻むと
 いうしくみであるため、処刑機械によって行われる理不尽な攻
 撃の結果、裁かれた人間の体は傷つき、痛みに伴った血液が流
 れることが連想される。カフカ少年にとって、「ぼくらの置か
 れている状況」は、攻撃によって痛みを感じ、それに伴って血
 が流れるというイメージを持っているため、血の赤さに対して
 否定的なイメージを持っていることが推測される。^(注6)

カフカ少年は、『流刑地にて』に登場する処刑機械について、
 父親と関連づけて以下のように述べている。

でも僕がほんとうに言いたかったことは伝わらなかつた
 はずだ。僕はそれをカフカの小説についての一般論として
 言ったわけではない。僕はとても具体的なものごとについ
 て、具体的に述べただけなのだ。その複雑で目的のしれな
 い処刑機械は、現実の僕のまわりに実際に存在したのだ。
 それは比喩とか寓話とかじゃない。^(第7章九八頁)

この場面でカフカ少年は、「その複雑で目的のしれない処刑
 機械は、現実の僕のまわりに実際に存在した」と話す。ここで
 の「処刑機械」について修士論文では次のように考察した。

ここで言われる処刑機械とは、カフカ少年のことを無自
 覚であれ傷つけようとする父のことだと考えられる。カフ
 カ少年は、「実際に存在した」処刑機械として父を認識し
 ていることから、父が自分を傷付けたその痛みは、かたち
 に残って消えない傷となっていると推測される。そのため、
 カフカ少年にとつての父は、自身のことを一方的に傷付け
 る機械のような人間味を欠いた存在として認識されている
 と考えられる。^(注7)

このことからカフカ少年によって語られる、「実際に存在し

た」「処刑機械」とは、「カフカ少年のことを無自覚であれ傷つけようとする父のこと」だといえるだろう。

また、カフカ少年は父から受けた「呪い」のような予言について話す際に、「僕の意識に鑿でその一字一字を刻みこむために」(第21章三四七頁) 繰り返し聞かされたのだと思いつている。処刑機械は、罪人に「鑿」で罪の名を「刻み込む」ため、カフカ少年が父から受けた行為が処刑機械のしくみと重ねられていることがうかがえる。この、父から受けた「呪い」とも呼べる行為について、修士論文では「父の言葉はカフカ少年の心に大きな傷を与えている」(注8)と考察した。

これらのことから、カフカ少年は、自身が攻撃されて傷つくことによって血が流れるというイメージがあるため、血に象徴される赤という色彩はネガティブな要素を持っていると認識していると考えられる。そして、カフカ少年が血に否定的なイメージを持つことで、自身の生命にも否定的になっているといえるだろう。

次にカフカ少年が父から受け継いだ遺伝子について語る場面を示す。

どれだけ強く望んでも、父親から受け継いだ^①としか思えない二本の濃い長い眉と、そのあいだに寄った深いしわを

ひきむしってしまうことはできない。そうしようと思えば父親を殺すことはできる(現在の僕の力をもってすれば決してむずかしいことじゃない)。母親を記憶から抹殺することもできる。でも僕の中にある彼らの遺伝子を追い払うことはできない。もしそれを追い払いたければ、僕自身を僕の中から追放するしかない。

そしてそこには予言がある。それは装置として僕の中に埋めこまれている。

それは装置として君の中に埋めこまれている。

(第1章一七頁)

カフカ少年は、この場面に登場する「父親から受け継いだ」「遺伝子」が処刑機械と同様の役割を持った「装置」として「埋めこまれている」ことに否定的であると読み取れる。そして、その父から受け継いだ遺伝子は「暴力をふくんだ暗い血」(第41章二八三頁)だと認識していると考察される。

論者は修士論文において、「カフカ少年にとって自分から切り離したい遺伝子とは、父親から譲り受けた遺伝子」(注9)のことであると分析した。そして、「カフカ少年は、〈暴力〉性を持った父親から、他者を傷付ける内容の『呪い』を受けることで、自身の内面にも〈暴力〉性が潜んでいることを認識している」(注

¹⁰と分析したため、カフカ少年は、自身の（暴力）性が体内の血液に象徴されていると感じて、自身の生命に否定的になつてしまつたと考えられる。

しかし、カフカ少年は「森の中核」で佐伯さんと出会うことで、血液に対しての認識に変化が生じたと推測される。

佐伯さんと「森の中核」で出会つた後の別れ際の場面を示す。

佐伯さんは黙つて抱擁を解く。そして髪をまとめていたピンをはずし、迷ふことなく、鋭い先端を左腕の内側に突き立てる。とても強く。そして右手でその近くの静脈をぐつと強く押さえる。やがて傷口から血液がこぼれはじめ。最初の一滴が床に落ちて、意外なほど大きな音をたてる。それから彼女はなにも言わずその腕を僕のほうに差し出す。また一滴の血が床に落ちる。僕は身をかがめて、小さな傷口に唇をつける。僕の舌が彼女の血をなめる。僕は目を閉じてその味を味わう。僕は吸つた血を口にくぐみ、ゆつくりと飲みこむ。僕は喉の奥に彼女の血を受け入れる。それは僕の心の乾いた肌にとても静かに吸いこまれていく。自分がどれほどその血を求めていたか、はじめてそのことに思いあたる。僕の心はひどく遠い世界にある。でもそれと同時に僕の身体はここに立っている。（中略）

「さよなら、田村カフカくん」と佐伯さんは言う。「もと
の場所に戻つて、そして生きつづけなさい」

（第47章三八二―三八三頁）

カフカ少年は自身が必要とした存在である佐伯さんから血液を自身の体内に取り込む。この行為に関して、修士論文においては以下のように考察した。^(注11)

佐伯さんは「髪をまとめていたピン」で自身の腕を突き刺し、流れ出た「血液」をカフカ少年に差し出す。カフカ少年は「喉の奥に彼女の血を受け入れる」。カフカ少年が佐伯さんのことを忘れずに記憶し続けることで、佐伯さんはカフカ少年の中で生き続けることができ、それと同時に、カフカ少年は自身に目を向けてくれた佐伯さんを心に留めておくことで、現実世界で生きていく意味を見出すことが出来るかと考察した。佐伯さんの一部である「血液」をカフカ少年が体内に取り込むことで、カフカ少年の中で佐伯さんを記憶し、生き続けさせるのだと考えられる。また、佐伯さんの「血液」が「僕の心の乾いた肌にとても静かに吸いこまれていく」という表現から、カフカ少年が佐伯さんの「血液」を取り込むことで、擬似的な補完が成立されていると推測される。

カフカ少年にとって佐伯さんは母親と重なる要素のある女性である。そのため、佐伯さんの血を体内に取り込むことで「疑似的な補完」を果たし、父親から与えられた〈暴力〉性を含んだ血液以外にも母親から与えられた血液が流れているということを思い出して、自身の生命を維持する血液に肯定的になれたと推測した。

赤という色彩に関して松岡武氏は、「ポジティブ、ネガティブを問わず、激しい感情の動きと結びつく」^(注12) 色彩だと述べている。

カフカ少年は、赤い血液に父親由来の〈暴力〉的な感情を見出して否定的な印象を持っていたが、母親由来の血液には、カフカ少年の存在を肯定しようとするプラスの感情が込められていることを発見し、赤い血液の肯定的な側面に気付いたのだといえる。カフカ少年は、自身の体内を流れる赤い血液には、プラスとマイナスの両方の側面が同居しており、どちらも受け入れることで生きている者と関わることが成立すると理解したのだと考察される。

カフカ少年は、フランツ・カフカの『流刑地にて』に登場する処刑機械が人間を一方的に殺していく様子を、「僕らの置かれていた状況を誰よりもありありと説明」していると考えている。

『流刑地にて』における処刑機械は、針で人間を刺して殺す仕組みとなっているため、その〈暴力〉による痛みには血液が流されることが伴う。カフカ少年は自身の父親にも「処刑機械」的な〈暴力〉性があると考えており、その〈暴力〉性が自身にも受け継がれていることを自覚する。このことから、カフカ少年にとって、「赤い」「血」は〈暴力〉によって流されるという否定的な印象を持つことになるかと考察した。

しかし、母親と重なる存在である佐伯さんから「血」を譲り受けることで、自身が愛されている存在であることを知り、精神的に満たされる。その結果、「血」の「赤」さに、生きることのプラスの面を見出し、「血」に象徴される「赤」という色彩の二面性に気付いて双方を引き受けて生きる決意を固めたといえるだろう。

四 「森」と「緑」の関係性

前節では、カフカ少年の中で血への認識が変化したことによって、「森」を出る決意を固めることとなったと考察した。本節では、前節をふまえて「森」に象徴される「緑」という色彩に対する認識の変化について分析する。

まず、カフカ少年の家出の動機として、自身の抱える孤独感とそこからの脱却が挙げられる。以下、カフカ少年と佐伯さんとの会話を示す。

「あなたはきつと強くなりたいのね」

「強くならないと生き残っていけないんです。とくに僕の場合には」

「あなたはひとりぼっちだから」

「誰も助けてはくれない。少なくともこれまでは誰も助けてはくれなかった。だから自分の力でやってみていくしかなかった。そのためには強くなる必要があります。はぐれたカラスと同じです。だから僕は自分にカフカという名前をつけた。カフカというのはチェコ語でカラスのことです」

(第33章一五四〜一五五頁)

この場面について、修士論文では以下のように考察した。^(註13)
 カフカ少年は、「これまでは誰も助けてはくれなかった」から、「自分の力でやってみていくしかなかった」と発言しており、「そのためには強くなる必要があります」、「強くならないと生き残っていけない」と述べている。このことから、カフカ少年は父親からの〈暴力〉と、母親に置き去りにされたことよって生じた孤独感という傷を持っており、孤独

な自分を支えるために一人で生きていける「強」さを求めていると考察される。

そのようなカフカ少年に対して、カラスと呼ばれる少年は、「君がやらなくちゃならないのは、たぶん君の中にある恐怖と怒りを乗り越えていくこと」と、「そこに明るい光を入れ、君の心の冷えた部分を溶かしていくこと」(第41章二八二頁五〜七行目)であると助言し、「それがほんとうにタフになるということ」(同頁)なのだと言言する。カフカ少年が、孤独な状態を維持したまま一人で生きていくための強さを手に入れようとする心理には、父親と母親という、子供にとって最も精神的に安心して接することの出来るはずの人物たちに〈暴力〉を振るわれたことよって、他者に裏切られた絶望感を二度と体験したくないという感情が隠されていると推測される。カラスと呼ばれる少年は、カフカ少年の他者に対する恐怖心を見抜き、カフカ少年が父親と母親に抱いている「恐怖と怒りを乗り越えることで過去の心の傷を克服させよう」としていることを考察される。カラスと呼ばれる少年のいう「明るい光」とは、心の傷を克服することで再度、他者と精神的につながりを持ち、支え合って生きていく関係を構築することを指している。

ると考えられる。そして、他者と精神的に繋がっていく力こそカフカ少年に必要な強さであり、その強さを手に入れることでカフカ少年の「心の冷えた部分を溶か」すことが出来る」と助言していると考察される。

「カフカ少年は父親からの〈暴力〉と、母親に置き去りにされたことよって生じた孤独感」を持つているといえる。また、孤独感を持つているカフカ少年に対して、カラスと呼ばれる少年は、「明るい光」を取り入れるというアドバイスをするが、これは「心の傷を克服することで再度、他者と精神的につながる」を持ち、支え合って生きていく関係を構築」すべきだと助言しているとも考察した。

では、カフカ少年に「心の冷えた部分」が生まれた原因とは何だろうか。カフカ少年が他者に恐怖心を抱ききつかけとして、母に愛されなかったと認識していることが挙げられる。そのことがうかがえる箇所を示す。

疑問。

どうして彼女は僕を愛してくれなかったのだろう。

僕には母に愛されるだけの資格がなかったのだろうか？

その問いかけは長い年月にわたって、僕の心をはげしく焼き、僕の魂をむしばみつづけてきた。母親に愛されなかつ

たのは、僕自身に深い問題があったからではないのか。僕は生まれつき汚れのようなものを身につけた人間じゃないのか？ 僕は人々に目をそむけられるために生まれてきた人間ではないのだろうか？

母は出ていく前に僕をしつかりと抱きしめることさえしなかった。ただひとときの言葉さえ残してはくれなかった。彼女は僕から顔をそむけ、姉ひとりをつれてなにも言わずに家を出ていってしまった。彼女は静かな煙のように、ただ僕の前から消えてしまった。そしてそのそむけられた顔は、永遠に僕から遠ざけられている。

(第43章三〇一〜三〇二頁)

この場面でカフカ少年は「どうして彼女は僕を愛してくれなかったのだろう」という「疑問」が「長い年月にわたって、僕の心をはげしく焼き、僕の魂をむしばみつづけてきた」のだと胸中を打ち明ける。このことから、カフカ少年は自身が母親に愛されなかった過去に苦しんでおり、そして未だに母親からの愛を受けていないことに苦しみ続けていることがうかがえる。

そのため、カフカ少年の抱える孤独感の根源は母親からの愛情の不足であるといえる。カフカ少年が、母からの愛を受けて満たされることで、自身の生に肯定的になり、改めて他者との

精神的な繋がりや回復することが、カラスと呼ばれる少年の助言にある、「明るい光」を心に入れることだと考察される。

しかし、カフカ少年は、他者が存在している世界で安心感のある繋がりや誰とも持てないことを「孤独」であると認識しているため、カラスと呼ばれる少年からの助言を理解できずにいると考察される。カフカ少年は自身の孤独感を癒すためには、自身を傷つける可能性のある他者を排除すべきだと考えているため、他者の存在しない「森」に足を踏み入れることとなると推測される。

しかし、カフカ少年の感じている「孤独」以外にも「孤独」が存在するということを大島さんは伝える。

「僕らがこれから行くこうとしているところは、深い山の中にあつて、快適な住まいとはとても言えない。君はそこにいるあいだ、たぶん誰にも会わないだろう。ラジオもテレビも電話もない」と大島さんは言う。「そんなところでもかまわないかな？」

かまわない、と僕は言う。

「君は孤独にはなれている」と大島さんは言う。

僕はうなづく。

「しかし孤独にもいろんな種類の孤独がある。そこにある

のは、君が予想もしていないような種類のものかもしれない」

「どんなふうによ？」

大島さんは眼鏡のブリッジを指先で押す。「なんとも言えないな。それは君次第でかわつてくることだから」

(第13章一九四〜一九五頁)

カフカ少年は大島さんによって「森」の中の小屋に連れられる。大島さんが、「君はそこにいるあいだ、たぶん誰にも会わない」と伝えた上で、カフカ少年が「孤独には慣れている」ためかまわないだろうかと確認を取ると、カフカ少年はうなづく。しかし、「孤独に慣れているから大丈夫」であると返答したカフカ少年に対して、「孤独にもいろんな種類の孤独がある。そこにあるのは、君が予想もしていないような種類のものかもしれない」と、孤独の在り方が複数あることを示唆している。

続けて大島さんは、別れ際にカフカ少年に対して、「森」の中にいることは「世界から完全に孤立している」(第13章二〇一頁)状態のだと告げる。しかし、大島さんが言った「いろんな種類の孤独」が理解できていないカフカ少年にとって、この時点では「世界から完全に孤立している」状態の内実がつかめていないと考えられる。

また、「森」にすることに快適さを感じているカフカ少年に對して、大島さんは自然の持つ危険性について伝えている。その場面を示す。

「自然の中でひとりぼっちで暮らすのはたしかに素晴らしいことだけれど、そこでずっと生活しつづけるのは簡単じゃない」と大島さんは言う。サングラスをかけ、シートベルトを締める。

僕も助手席に座って、シートベルトを締める。

「理論的にはできなくはないし、実際にそうする人もいる。しかし自然というのは、ある意味では不自然なものだ。安らぎというのは、ある意味では威嚇的なものだ。その背反性を上手に受け入れるにはそれなりの準備と経験が必要なんだ。だから僕らはとりあえず街に戻る。社会と人々の営みの中に戻っていく」

(第17章二六五頁)

大島さんは、「自然の中でひとりぼっちで暮らすのは」「簡単じゃない」ということ、「自然というのは、ある意味で不自然な面があり、自然の中にある安らぎには「威嚇的」な要素もあると発言するが、これらの言葉はカフカ少年が実際に「森」の奥に入って「閉じた円」を体験していない状態では、すぐに理解することはできず、予告的な役割にとどまっているといえる。

大島さんから、「もうひとつの孤独」の存在と、自然の持つ「威嚇的」な面について、予告的な発言を受けたのち、カフカ少年はそれらを実際に「閉じた円」と呼ばれる空間で体験したと推測される。「閉じた円」という空間で佐伯さんと会話する場面を示す。

「君の名前は？」と僕はべつの質問をする。

彼女は小さく首を振る。「名前はないの。私たちはここでは名前を持たないの」

「でも名前がないと、君を呼ぶときに困るかもしれない」

「呼ぶ必要もないのよ」と彼女は言う。「もし必要があれば、私はそこにいる」

「ここでは僕の名前もたぶん必要ないんだね」

彼女はうなずく。「だってあなたはあなたであり、ほかの誰でもないんだもの。あなたはあなたなんですしょ？」

「そうだと思う」と僕は言う。でもそれほど確信は持てない。

僕は本当に僕なんだろうか？

彼女はじつと僕の顔を見ている。

(第45章三四六〜三四七頁)

カフカ少年は「森」の奥へと足を踏み入れた結果、「森の中核」にある「閉じた円」という空間に到達し、そこで一五歳の少女

の姿をした佐伯さんと共に過ごす。カフカ少年が少女に名前を尋ねると、名前の必要性がないと返答される。カフカ少年は、自身が名前を失っても「僕は本当に僕なんだろうか？」と疑問を持ち始め、「閉じた円」が現実世界とかけ離れた価値観によって機能していることに違和感を覚える。

「閉じた円」という空間では「誰もここでは名前を持たない」(第45章三五〇頁)上に、「時間」すらも「ここでは重要な要素じゃない」(同頁)ことに気付く。そして、その空間に留まり続けることで、「僕はいつたくなるのだろうか？」(同頁)と不安を持っている様子がうかがえる。

「閉じた円」について、修士論文では以下のように考察した。^{注14}

カフカ少年は佐伯さんという空間を「閉じた円」と表現する。「森」の中核は、一般社会から切り離されており、カフカ少年と佐伯さんだけが存在する閉鎖的な空間である。「円」が、現実世界で生きた状態で互いに求め合い、感覚を共有するのに対し、「閉じた円」とは、現実世界から切り離された、死後の世界とも言える空間で物理的に他者を遮断し、そして佐伯さんと求め合うことなく、ただ互いの孤独を理解して、共有することで一体感を持つ状態を表しているのだと考えられる。

かつての佐伯さんと過去の恋人が作った「円」は、人間が生きた状態で形成されるため、「ほころび」が生じるのに対して、「閉じた円」は死者によって形成されるため、外的要因やその人の価値観変化が無く、「ほころび」が生じることがないと考えられる。そのため、「閉じた円」は外界を完全に遮断しきった空間であり、崩れることのない「円」が形成されているという意味では補完が成立した状態だといえるだろう。しかし、カフカ少年は「閉じた円」に留まることに違和感を持つ。円は、「完全性」を表すのと同時に「始めも終わりもない無時間、上も下もない無空間」であると指摘されている。カフカ少年は、「時間はここでは重要な要素じゃない」こと、「誰もここでは名前を持たない」ことを実感しているため、「閉じた円」が「始めも終わりもない無時間」であることを認識し始めたのだと考えられる。「閉じた円」についての認識がされ始めると、カフカ少年は「僕はいつたくなるのだろうか？」と疑問を持つことから、カフカ少年は「閉じた円」に留まることで安らぎは得られるが、生きた状態で他者と繋がることと、「世界でいちばんタフな15歳の少年になる」という本来の目的が達成されないことに気付き、「閉じた円」が自分の

望んだ空間で無いと感じ始めたのだと考察される。

このことから、「閉じた円」とは、現実世界から切り離された、死後の世界とも言える空間で物理的に他者を遮断し、そして佐伯さんと求め合うことなく、ただ互いの「孤独」を理解して、共有することで一体感を持つ状態」であるといえる。そのため、「閉じた円」には、死者としての他者は存在するが、生きた状態の他者は不在であると考察される。

また、「カフカ少年は『閉じた円』に留まることで安らぎは得られるが、生きた状態で他者と繋がることと、『世界でいけばんタフな15歳の少年になる』という本来の目的が達成されないことに気付き、『閉じた円』が自分の望んだ空間で無いと感じ始めた」と分析した。このことから、「閉じた円」は生きている他者を遮断しきっているため、自分を形作ることも不可能な空間であると考察される。

本論において、カフカ少年の抱える「孤独」は「森」に象徴される「緑」と結びつきが深く重要だといえるが、本文に登場する「孤独」は、論者の解釈が加わった〈孤独〉と〈孤独感〉に分類されると推測される。

カフカ少年が「森」の外にいた頃感じていた「孤独」が、生きた状態で関わりを持つ他者と完全に一体となれないことで

孤独に感じるといふ〈孤独感〉であったのに対し、「森の中核」の「閉じた円」で体験した、生きた存在としての他者が全く存在しない状態によって起こる「孤独」は、大島さんによって語られた「世界から完全に孤立」するという、誰とも微かな繋がりさえ望むことの出来ない〈孤独〉であったと推測される。

カフカ少年の〈孤独感〉の根底には、母親に愛されなかったことよって生まれた、他者との関係における恐怖心がある。カフカ少年は、〈孤独感〉からの脱却を求めた結果、「森」に入ることとなる。しかし、大島さんから「孤独」にも種類があることを知らされ、「緑」に囲まれた「森」の中で自身の知らなかった〈孤独〉を体験することとなる。カフカ少年にとって、自身に〈暴力〉を振るう可能性のある他者との繋がりを断つことが「孤独」だと考えていたが、「森」で全ての生きた他者を遮断しきったことで「世界から完全に孤立」する状態を体験したことよって、より深い〈孤独〉を知ったといえる。

このことから、生きている現実世界において、他者は存在しているが、自身が誰とも繋がりを持つことが出来ていないと感じる状態を〈孤独感〉と定義する。それに対して、生きた他者の存在しない「森」にあったのは〈孤独〉そのものだったといえる。カフカ少年は「森」の中で「緑」が深まるにつれて、〈孤

独)の度合いも連動するかのように深まるということに気付いて、「森」の「緑」に安らぎ以上に危険が潜んでいることを理解して「森」を出たと分析した。

五 おわりに

これまで、「赤」と「緑」の象徴とその変化について分析してきた。本節では双方を合わせてカフカ少年の心理変化を追っていき、赤と緑の色彩が持つイメージがどの点で転換しているのかについて明確にする。

本作においては、カフカ少年が孤独から脱却し、他者との繋がりを回復させることが重要な要素であると推測するが、『海辺のカフカ』執筆以前の村上春樹のコメントに、本作と関わる注目すべき箇所が見受けられる。

村上 それと、コミットメント(関わり)ということについて最近よく考えるんです。たとえば、小説を書くときでも、コミットメントということがよくにとってはものすごく大事になってきた。以前はデタッチメント(関わりのなさ)というのがよくにとっては大事なことだったんですが。

村上 『ねじまき鳥クロニクル』はよくにとっては第三ステップなのです。まず、アフォリズム、デタッチメントがあつて、次に物語を語るという段階があつて、やがて、それでも何か足りないというのが自分でも分かつてきたんです。その部分で、コミットメントということが関わってくるんでしようね。ほくもまだよく整理していませんが。

コミットメントというのは何かというと、人と人との関わり合いだと思っただけで、これまでにあるような、「あなたの言っていることはわかるわかる、じゃ、手をつなごう」というのではなくて、「井戸」を掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる、というコミットメントのありように、僕は非常に惹かれたのだと。

しかし、それがこの現実世界、実際的な生活の面で、ほくは何をもたらずかというの、ほくにもまだよくわからないのです。いまほくは日本に帰ってきて、じつにそれを探している途上なのです。小説のなかではほくはそれを解決しているのだけれど、小説の方が先へ行ってしまうと、

ぼく自身がついていけないわけですが、ただ、感じるんですよね、世の中が今変わりつつあるし、変わらなくてはいけないというのは。

だから、ぼくは地震のことについても、オウムのことについても、何かひとつの転換点、そういうものとして非常に興味を持っているのです。事件そのものは非常に不幸なことではあるけれども、それらを契機として、ワザワイを転じて福となす、というか、何かが開けていくという予感がするんです。^(注15)

ここで村上は、以前はデタッチメントを重要視していたが、「コミットメント」ということがぼくにとってはものすごく大事になってきたのだと語っている。また、「井戸」を掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる、というコミットメントのありように、僕は非常に惹かれたのだと続けている。本作における色彩の持つ象徴と、村上の言う「コミットメント」とはどのように関連するのだろうか。カフカ少年は、幼少期に母と姉に置いて行かれ、父から「呪い」を刻まれ続けたことから、自身が愛されていない存在だと感じ、他者との安心感のある繋がりを持つことに恐怖感があつたといえる。このことよってカフカ少年の〈孤独感〉が発生

していると考えられる。

次に、自身の体内に〈暴力〉性を持った父から受け継いだ、「暴力をふくんだ暗い血」(第41章二八三頁)が流れていると感じ、そのことに苦しむ。そして、人間の持つ〈暴力〉性によって傷つくこと「血」が流れることから、血の「赤」さにネガティブな感情を持つこととなる。

しかし、大島さんの車体の色による事故率の話題から、「赤」よりも「緑」の方が、事故率が高く危険であると知らされることにより双方の色彩に対するイメージに変化が起こるきっかけとなる。

その後、カフカ少年は「森」に入り、「閉じた円」で生きた他者の存在しない空間を体験することで、他者の不在によって自身の存在すらも消滅していく〈孤独〉の存在に気が付いたといえる。

また、カフカ少年にとつて母のような存在として認識されている佐伯さんから「血」を譲り受けることで、自身が愛されている存在であることを知る。「血」による「赤」さに、〈暴力〉性以外にも生きることのポジティブな側面が存在することを発見して生き続けることを決意したと考えられる。そして、「赤」への認識が変化したこととほぼ同時に、「緑」への認識も変化

したと考えられる。生きた他者が存在していても、完全に一体となつて安心感を得ることが出来ない〈孤独感〉よりも、「森」の中で生きた他者を排除しきつてしまうことの方が、他者との繋がりを持つ可能性が完全に断たれることとなり、それは、深い〈孤独〉であることに気付き、「森」を出る決意を固めたといえるだろう。

このことから、村上の言う「井戸」を掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる、というコミットメント」のイメージが『海辺のカフカ』においては、佐伯さんから譲り受ける、「血」に込められているのではないかと考察した。

以上のことから、本論の結論を述べる。

カフカ少年にとって、「赤」は「血」のイメージが込められており、〈暴力〉を連想させる色彩であった。しかし、佐伯さんから受け取った「血」には〈暴力〉ではなく、カフカ少年が生きるために必要な、母親から愛されているというイメージが込められていたため、「血」の「赤」という色彩にポジティブな側面を発見することが出来たといえる。そのことよって、カフカ少年は「赤」への認識に変化が生じ、「血」の「赤」の持つプラスの面とマイナスの面の双方を引き受けて生きていく

ことを決心したと分析した。

また、「緑」には「森」のイメージが込められている。カフカ少年は「森の中核」で佐伯さんと安らかなひと時を過ごす、生きた他者を排除しきつてしまう「森」は、「孤独」な空間であることに気付いたと考えられる。生きた他者の存在する世界には〈孤独感〉があつたが、生きた他者の存在しない世界には〈孤独感〉以上に深刻な〈孤独〉があることに気付いたため、「緑」が安らぎを与える色彩から、危険な色彩であるという認識に変化したと分析した。

そして、大島さんによる「緑」のスポーツカーの危険性についての話題は、単純に事故率の高さを伝えていたのではないと考察した。「緑」から連想される「森」は一見安全であることを連想させるが、「森」の深い「緑」によつて自身の姿が隠されて他者に認識されなくなると、〈孤独〉になつてしまう危険性があると示唆していたと言える。また、「赤」は、「血」を連想させるため、他者とかかわることで発生する〈暴力〉を想起するという点においては危険であることを予感させるが、その一方で「赤」は目立つ色彩であるため、他者に自分の存在を認識してもらえ結果、〈孤独〉に陥る可能性が低くなるという安全性があると示唆していたという分析に至った。

- 注1 本文引用は『海辺のカフカ(上)』(新潮社 二〇〇二年九月)、『海辺のカフカ(下)』(新潮社 二〇〇二年九月)によるものとする。なお、傍線部は論者によるものとする。
- 2 大岡愛梨沙「村上春樹『海辺のカフカ』論」(暴力)と〈癒し〉の関係から読み解くテーマについて」(ノートルダム清心女子大学大学院修士論文 二〇一九年一月)
- 3 村上春樹『「そうだ、村上さんに聞いてみよう」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶつつける282の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか?』(朝日新聞社 二〇〇〇年八月)
- 4 松岡武『色彩と心理おもしろ事典』(三笠書房 一九九四年四月)
- 5 清野恒介『色彩用語事典』(新紀元社 二〇〇九年九月)
- 6 注2に同じ
- 7 注2に同じ
- 8 注2に同じ
- 9 注2に同じ
- 10 注2に同じ
- 11 注2に同じ

- 12 注4に同じ
- 13 注2に同じ
- 14 注2に同じ
- 15 村上春樹『村上春樹全作品1990〜2000』(約東社 二〇〇三年一月)
- された場所で、村上春樹、河合隼雄に会いに行く」(講談社 二〇〇三年一月)

本稿の内容は、二〇一九年六月一六日に本学にて行われたノートルダム清心女子大学日本語日本文学会での発表に基づきます。

発表に際し御教示を承りました皆様には、厚く御礼申し上げます。
(おおおか ありさ/本学大学院博士前期課程修了)

キーワード=血、森、孤独